

リタイア後の人生は忙しい (BM塾、もの書き、座頭市)

(一社)未踏科学技術協会
特別研究員
浜野 正昭



1) リタイアした後の人生は、世の中へのお礼返しに充てよう

子供のころ、「♪村の渡しの船頭さんは今年六十のおじいさん 年はとってもお船をこぐ時は 元気一杯櫓がしなる ソレ ギッチラ ギッチラ ギッチラコ」という唄を聴いたり歌ったりしたことがある。それが、自分が70歳になっても、斗酒なお辞さずの日々を送っているのだから驚きである。

テレビでも言っていたが、実感としては昔の60歳は今なら80歳程度ではなかろうか。実に20歳の若返りに相当する。

そして、振り返ってみると、60歳で定年を迎えた後のこの10年間は何と充実した日々であったか。世の中への御礼返しを意識しつつ奮励努力したその一端をご披露するので、どうぞご笑読下さい。

2) 明治大学兼任講師+寺子屋BM塾塾長

まず、明治大学の兼任(非常勤)講師は、2003年4月から初めて、今年2012年3月に終了した。理工学部の山元洋教授からお世話頂いてから、丁度10年間勤めたことになる。電気電子材料学の講義や学生実験の指導を担当したが、やっている内に、もしかして、自分は教育者が合っているのではないかと気が付いた。学生が「判った!」といった顔をしたときの達成感がとても快いからである。そうすると、何とか判らせようとする努力を惜しまなくなる。講義ノートは毎年更新したし、実験前の原理説明や手順書のプリントは充実していった。

ただ、残念なのは学生の勉学姿勢が年毎に受身になっていく傾向が感じられることである。恐らく、図書館でものを調べる回数なども激減しているであろう。また、電気の基礎知識に欠ける学生も多い。これは、高校までの理科教育の問題ではあるが、

さて、もう一つの寺子屋BM塾であるが、2007年の前期講座から始まった。BM協の理念の一つが、「磁性材料に関する普及・

啓蒙」であるので、技術委員会の一人として、寺子屋設立の提案をしたところ皆様に快諾され、かく言う塾長自らの講義「永久磁石のイロハ」から始まった。これが当たりで、後期も同一講義で計95名が受講した。その後の継続講座は、「BMニュース」に毎回報告している通りであるが、述べ受講生が1300名を超えて、今や寺子屋BM塾が協会の顔の一つになっていることは幸甚である。そして、この初心者教育塾はもはや私の大切な生きがいとなっている。

3) もの書きや講演会講師としてのボランティアもまた楽し

半分自慢しながら、ここ5年間で書いたものを列挙してみる(共編、共著を含む)。

- ① 技術書「永久磁石—材料科学と応用—」2007年9月出版 アグネ技術センター(日本磁気学会・平成24年度出版賞)
 - ② 技術書「強磁性体材料と最新応用技術」2007年12月出版 シーエムシー出版
 - ③ 解説「永久磁石は地球環境の守護神、3部作」、電設技術、2009年1~3月号、日本電設工業協会
 - ④ 監修「特集：世界をリードする永久磁石材料の進展」、金属、2009年8月号、アグネ技術センター
 - ⑤ 監修「特集：脚光を浴びる永久磁石材料の最新技術動向」、工業材料、2010年7月号、日刊工業新聞社
 - ⑥ 技術書「ネオジム磁石のすべて」2011年4月出版 アグネ技術センター
 - ⑦ 技術書「図解 希土類磁石」2012年7月出版 日刊工業新聞社
- 上記でアンダーラインを付したのは月刊誌である。また、③以外は多くの分担執筆陣に助けて頂いた。感謝感激雨霰である。正直に言うと、これらの著述には謝金や印税収入があるので、正真なボランティアとは言えないが、諸経費を計算すると赤字であることは間違いない。

このような沢山の執筆要請の背景には、地球温暖化による環境・エネルギー意識の高まりや、例の「レアアース」供給問題が存在していることはご推察のとおりである。

もの書きの他に、講演会講師も数多くこなしてきた。永久磁石は大変有り難いことに今や旬のテーマである。お蔭様で、リタイア後も退屈をもてあましたことが無い。

4) 「座頭市」を見ながら寝酒を少々?

リタイア後の楽しみは寝酒である。出勤時の満員電車に乗る必要は余り無いので、多少呑み過ぎてしても平気である。

その寝酒のお供がテレビの「座頭市」再放送シリーズである。勿論、勝新太郎主演で、石原裕次郎や吉永小百合などの豪華な脇役が毎回登場する。TV局はBSフジ：8チャンネルで、毎週月曜日から金曜日まで午後3時からの1時間番組である。当然、録画して就寝前の深夜に見ることになる。

有り難いことに、シリーズものを何度も放映してくれるので、今は同じタイトルの番組を2回目として見ている。何度見ても面白いのであるから仕方が無い。しかし、残念ながら9月5日で終了した。

ところで、市つアンは、どうやら完全なる盲目ではなく、光の陰影はぼんやりと判別できるようである。そうでなければ、音と匂いだけでとっさに判断して、あんなに多くの人が切れる訳は無い。

もう一つ、市つアンはいつも正当防衛である。自分から斬りにいくことはない。やくざや素浪人達が、先に抜いて切り掛かるので、止むを得ず降りかかる火の粉を払っている訳である。これは徹底している。

で、寝酒であるが、日本酒2合と決めているが、時々オーバーすることもあるのは、当然「座頭市」のストーリーがなせる業である。断じて私に責任は無い・・・と思う。

以上、戯言(たわごと)御免被ります。